

研究プロジェクト名

ソシュールの草稿の生成論的研究



Genetic Study of Saussure's Manuscripts

大学院文学研究科・教授

松澤 和宏
Kazuhiro Matsuzawa



まつざわ かずひろ プロフィール

1978年 早稲田大学第一文学部フランス文学科 卒業
1981年 筑波大学大学院文芸言語研究科各国文学専攻 修士課程 修了
1988年 筑波大学大学院文芸言語研究科各国文学専攻 博士課程 満期退学
1988年 パリ第8大学にて文学博士号(パリ第8大学)取得
2004年 名古屋大学にて博士(文学)号取得

研究経歴

1989年 大東文化大学文学部 専任講師
1991年 大東文化大学文学部 助教授
1995年 名古屋大学文学部 助教授
1997年 フランス国立科学研究センター近代テクスト草稿
研究所客員研究員、国際シンポジウム「生成」組織委員(パリ)
1999年 名古屋大学文学部 教授
2000年 名古屋大学大学院文学研究科 教授
2002年~ 21世紀COEプログラム「統合テクスト科学の構築」文学部門責任者
2003年 国際シンポジウム「テクストとその生成」コーディネーター

研究分野

- (1) フェルディナン・ド・ソシュールの草稿の生成論的研究
- (2) 生成論(生成批評)、テクスト理論
- (3) ギュスターヴ・フロアールの生成論的研究(『ボヴァリー夫人』『感情教育』)
- (4) 日本文学(夏目漱石、宮沢賢治など)
- (5) 文学・芸術および社会思想の領域におけるモダニズム

受賞歴、レクチャーシップなど

1993年 浪沢・クロード賞本章
(毎日新聞社主催、フランス大使館、日仏会館後援)
2004年 宮沢賢治賞奨励賞
(主催者 花巻市、選考者 宮沢賢治学会)
2003年 日本学術振興会 科学研究費基盤研究
1997年 日本学術振興会 海外研究者派遣
1992年 文部省科学研究費出版助成
1982年 フランス政府給費留学生

自筆草稿に見られる推敲のプロセスは、ソシュールの思考の逡巡逡巡の現場を生々しく示しており、それを分析の俎上にのせることによって、初めてソシュールの直面していた難問の所在が判明し、同時代の言語学や文献学、心理学や哲学、社会学との関連も、草稿における具体的な言及や用語の取捨選択などを通して明らかにされる。このためには、フローベールなどの文学研究の領域における草稿研究においてすでにめざましい成果を挙げている生成論の方法を用いた本文や異文の復元と注釈がもつとも有効であろう。加筆や削除を復元するこの校訂版(日本語とフランス語)は、今後世界中の研究者が参照可能となる初めての一般言語学をめぐるソシュールの草稿の本格的な生成批評版となるだろう。

(2) ジュネーヴ大学公立図書館に所蔵されている編著者たちの書簡や資料を調査すると、今日に至るまで明らかにされてはこなかった『講義』の執筆・編集・刊行の経緯が次第に判明していく。ソシュールの草稿や学生の聴講ノートが、どのように編著者たちによって解釈され、下書き段階を経て編集されたか、その結果原資料といかなる相違が『講義』の本文との間に生じたのか、その改竄的編集過程の全貌が明らかにされてくる。『講義』の成立過程を簡略に図示すれば以下になるだろう。

第一回講義……………↓
第二回講義……………↓
第三回講義 → 下書き → 編集 → 『一般言語学講義』
ソシュールの自筆草稿群……………↑

(3) したがって本プロジェクトは、弟子たちの手によって編集・執筆された『講義』がいかなる点で師ソシュールの思想を裏切り歪曲してしまったかを、一字一句に即して明らかにすることを射程に入れている。弟子たちの編著作である『講義』に依拠してソシュールが論じられている状況が、この新たな校訂版とそれに基づく解釈によって一変されることは確実であろう。そもそも「記号の恣意性」を第一原理とした演繹的体系をソシュールは必ずしも考えてはいなかったこと、言語の地理的な多様性や歴史性への着目を通して普遍文法的な方向性とは別の方向が模索されていたことが判明してくるだろう。言語の根拠は、論理的な合理性にあるのではなく、様々な言語共同体の場所性と歴史性の裡に探られるべきである、とする多元的な人文的思考の誕生に立ち会うことになるかと私は考えている。いずれにしても、既成の「構造主義の始祖」というソシュール像は大きな改変を迫られることになるだろう。

名古屋大学における高等研究員の活動を通じて、ソシュールの思想の劇の実証的な復元に努め、21世紀COEプログラム「統合テクスト科学の構築」と連携しながら、言語・記号・テクストをめぐるソシュールの多元的な人文的思考の可能性を探っていくたい。

フェルディナン・ド・ソシュールの名が冠せられている『一般言語学講義』(以下『講義』と略す)は弟子のシャルル・バイイとアルベール・セシュエの手によって、師の歿後三年目にあたる1916年に刊行された。『講義』によって蒔かれた種子は、世紀の後半には言語学の領域に留まらず、人類学や文学研究などにおいて豊かな結実を見せることになった。『講義』は、こうして構造主義や記号論の公認聖書のごとき権威を賦与されるに至ったことは、今日ではもはや動かし難い事実と言うべきかもしれない。

ところがソシュール自身は、1880年代に言語や記号に関する一般理論の「書物」を構想していたことがあるが、その後この構想を断念・放棄したのであり、生前一般言語学や記号論に関する論考を刊行しようとする意図すらもってはいなかったという謎めいた事実が残る。本プロジェクトの目的は、一般理論をめぐるソシュールの謎めいた沈黙のなかに潜んでいる〈思考の劇〉を厳密に復元することにある。そのための最良の方法は、今日にいたるまで依然としてその大部分が未刊行であるソシュールの夥しい自筆草稿群、および彼の「一般言語学」の講義に出席した学生の聴講ノートの徹底した解読・分析・解釈をおいてほかにないと思う。

そもそも書名にもとられている一般言語学講義は、前任者の病氣辞職という半ばは偶然によってソシュールが1907年から1911年にわたって隔年に行うことに

なった3回の講義であるが、ソシュールは聴講生に「言語学の哲学的講義」に関して、「そうした主題に関する一冊の書物を執筆することは、考えてみることもできません。著者の決定的な思想が示されなければならぬのですから」と語った記録が残されている。この深い断念を滲ませたソシュールの言葉は、弟子の手によって第三回講義を基にした「決定的」な形を与えられて刊行された『講義』との懸隔を十分に示唆しているのではないだろうか。未完の草稿を物質的な痕跡とするソシュールの不在の「思想」に対してわれわれが問いかけると、この未完の草稿に対するわれわれの理解様式そのものが逆に問われ試されることになる。1996年にジュネーヴのソシュール邸からソシュールの夥しい自筆原稿が新たに発見されたことは、ソシュール研究にとっては特筆に値する出来事であった。本研究は、ジュネーヴ大学公立図書館に現在保管され、2002年春から閲覧可能となった新たな自筆草稿を含めたソシュールの原資料の総体を、生成論の観点から加筆や削除も含めて解読・分析しながら、ソシュールの暗中模索に似た「思考のドラマ」の復元に努め、一般理論の構想とその断念・抛棄の真相に迫ろうとするものである。

本プロジェクトの独創的な特色や国際性、および期待される成果を以下列挙しておこう。

- (1) これまでソシュールの自筆草稿の推敲プロセスの立ち入った分析はほとんどまったくなされていない。